

# 1. 背景と目的

## 1) 背景

私たちは安心して安全な暮らしを求めています。

これは地球上の人々に共通する思いです。

CO<sub>2</sub>による温暖化、これに伴う海水面の上昇やオゾンホールの解消も重要な課題です。これと並んで、暮らしに直結する身近な安全や安心を確保することも、特に都市部においては早急に対応すべき課題として位置づけられます。高齢者や障害者、子どもたちなど社会的な弱者と呼ばれる人たちが、当たり前のようにまちなかを安心して移動できる環境を整えていくことも、私たちの責務でしょう。

特に住宅地の狭隘な道路は高い塀や生け垣に遮られ、出会い頭の事故や接触を招いています。交差点の視認性の確保とともに、接触時の回避スペースを角切り等により確保することが、万が一の安全を守る良好な手段として位置づけられます。

角切り部分が後退し、低く見通しの利く形状を確保することで、まちなかの安全性が確保でき、植栽などと組み合わせることで、緑化や景観の向上、ヒートアイランド現象やCO<sub>2</sub>削減などにも寄与していきます。

今回の調査は、国立市、国分寺市、小金井市、府中市、調布市、稲城市、多摩市、日野市の8市を対象としました。

### 対象とした8市について

多摩地域の水の大動脈である多摩川は、太古のむかしには、古多摩川と呼ばれ現在よりもかなり北方を東流していました。その後幾度となく流れを変え、川岸段丘やハケなど独特の地形を形成していきます。地形としては未発達で比較的平坦な流域を持つ多摩川の豊潤な水源は、人々の暮らしや文化を育み、緑豊かな自然景観と、これを活用した集落やまちなみが調和した穏やかな風景を形づくってきました。

また、多摩川は水運や漁業の場でもあり、その流域には水路が張り巡らされ、田園が広がり、まさに多摩の生活と交流の舞台ともいえるべき地域でした。

やがて、道路や鉄道などの基盤整備が進み、水を中心とした人の輪が、駅を中心とした人の流れへと変わり、まちの中心部も少しずつ移動していきます。沿川には工業の発展に伴って工場、コンクリートプラント、倉庫などが建ち並ぶようになりました。

近年では、野球場やサッカーグラウンドなどスポーツ対応の施設が河川敷に整備され、堤防はジョギングやサイクリング等に利用されています。また、河川環境への配慮も法的に位置づけられ、動植物の生息環境としての大きな空間の価値も見出されています。多摩川の風景と共に多摩川から見たまちの景色も日々移り変わってきました。

今回の調査は、多摩川中流域に位置し、環境や生活圏が似通っている8市において、今のまちの状態を緑と安全の視点から調査を行うこととしました。

## 2) 目的

安全性が確保された住宅地の交差点などの模範的な事例を収集、整理、公開することで、特にまちなかの交通安全性の確保、道路環境や景観の向上などを目指します。

多摩地域の8市において、特に住宅地の交差点の中から、安全性が確保された模範的な事例（安全緑地・模範例）を収集し、その処理や性格などによって内容を整理し、カルテ化します。この模範集は、公的な安全性確保の役割を担う、市民、企業、行政などがそれぞれの分担を認識し、ソフト、ハード両面からの課題解決に向けての資料として活用が期待されます。